

WHO の「健康」の定義における Well-Being の意味とスピリチュアル・ペイン
—アリストテレスのテロスと善の定義と人間の行為の性質—
**The Meaning of Well-Being in WHO Definition of Health
and Spiritual Pain**
—Aristotle’s Definition of ‘telos’ and ‘good’,
and the Nature of Human Deeds—

田村亮子
TAMURA Ryoko

Abstract

‘Well-being’ can be defined as the fulfillment of ‘telos’ which each of all existing things has. The correlations of telos of things are complex and good and evil happen simultaneously when telos of things collide with one another. In order to achieve and help the fulfillment of telos of things which are thought to help humans live better and more easily in this world, human beings select seemingly better actions and carry out those acts. Because the relations of telos of different things and telos of the levels which construct each thing are very complex, it is impossible for any human being to have the entire picture of the good and choose only good actions. This causes humans feel various kinds of pain. To understand the nature of pains humans experience, spiritual level needs to be differentiated from mental level.

キーワード：ウェル・ビーイング、善、テロス、スピリチュアル・ペイン、幸福

Keywords: well-being, good, telos, spiritual pain, happiness

1. はじめに

WHO の「健康定義」は、健康への関心を一般に広めることを目的とし、WHO 憲章における人間の基本的権利と表裏一体をなすものとして 1948 年に以下のように制定された。¹

Health is a state of complete physical, mental and social well-being and not merely the absence of disease or infirmity. (健康とは、病気でないとか、弱っていないということではなく、肉体的にも、精神的にも、そして社会的にも、すべてが満たされた状態にあることをいいます。)

[日本 WHO 協会訳、下線は筆者]

この定義は今日まで変更が行われてはいないが、1998 年の第 101 回 WHO 執行理事会において行なわれた WHO 憲章見直しの際に、イスラム圏担当の事務局から、この定義に、spiritual と dynamic という 2 語を追加し、以下のように変更する提案が行われた。²

Health is a dynamic state of complete physical, mental, spiritual and social well-being and not merely the absence of disease or infirmity. (下線は筆者)

この提案が行われた背景には、経済至上主義と物質文明の追求の加速によってもたらされた人間精神の荒廃に対する懸念の広がりがあった。この提案は WHA(World Health Assembly)37.13 において討議され、spiritual という言葉が健康定義の physical, mental and social に次ぐ第4の要素として注目を集めるようになった。

この提案は、WHA52(1999)で否決された。否決されたのは、spiritual とともに提案された dynamic という文言が、変更を提案したイスラム文化圏独自の健康観と関連していたため、dynamic と spiritual を同時に入れることで、本来、すべての宗教、思想を超越したものであるべき健康定義がイスラムという特定宗教の世界観と混同されることが懸念されたのが主な理由と考えられている。³

しかし、WHO は、spiritual という語を健康の定義には入れなかったものの、様々なレベルで spiritual に関する問題の検討を続け、パリアティブ・ケア (palliative care 緩和ケア) 等を含むいくつもの領域における議事録には spiritual に関する検討結果がふんだんに盛り込まれている。⁴ そして、spiritual という語が提案されたことを契機に、人類の歴史において、長年当然視されていたにもかかわらず、近代科学の発達に伴って、わきに追いやられていた spiritual に関する問題が、様々な研究領域を横断して顕在化してくることとなっただけでなく、spiritual に関する問題を新たに考えるうえで、well-being の概念そのものについても、質問が出されるようになってきた。

それらの質問とは、well-being とはそもそもどのようなことか？ 何を基準として well と判断することができるのか？ Well か否かは誰がどのように判断しうるものであるのか？ Well-being は complete physical, mental and social well-being と complete という形容詞が共有されたうえで、physical, mental, social の3点がすべて満たされる必要があるのか？ Physical well-being, mental well-being, social well-being は互いにどのように関係しているのか？ また、mental well-being とは区別されるべき spiritual well-being があるのではないか、そして、mental と spiritual とはどのような違いがあるのか？といった問いである。

これらの問題は幾重にも絡まっているため、well-being の日本語訳によって浮かび上がってくる観点の違いを考察の着手点としたい。

2. well-being の日本語訳が示す観点の違い

2.1 well-being の日本語訳：「良好な、満たされた状態」と「幸福」の違い

Well-being という語は、上記の日本 WHO 協会訳では「満たされた状態」となっているが、これまで、この語の他に「良好な状態」そして「幸福」という語があてられてきている。

しかし、「満たされた、良好な状態」と「幸福」という概念は、そもそも、概念の種類自体が異なるものである。それは、前者が「(主体から独立した客観的) 事実」を表す概念であるのに対して、後者は主体の感じ取る「思い」であるという違いである。

「満たされた、良好な状態」は、対象とする人物の状態が well-being に達しているか否かを、他者が、五感で経験できるデータを理解し、その理解の正誤を判断しうる（「必ず」判断できるわけではなく、判断できたとしても、必ずしも「正しく」判断できるわけではない

が)「(客観的) 事実」である。たとえば、ひとりの人間の **physical well-being** は、その人物の体重、身長測定、血液検査等各種の検査と診察によって **well** か否かを他者が判断することが可能である。また、ある人々に一定以上の収入、衣食住と家族関係、社会的地位の安定等が確保されているかについてのデータを取り、そのデータを検討すれば、それらの人々が **social well-being** の状態にあるか否かと、第三者が判断することが可能である。

一方「幸福」とは、個々人(主体)がその「こころ」で感じ取る「思い」である。そして、「満たされた、良好な状態」は必ず「幸福」と並行して発生してくるわけではない。

いくつかのケースを通して考えてみよう。

ある人々は健康で、経済的に裕福で、衣食住は満ち足り、家族関係、社会的地位に問題はないにもかかわらず、自らを不幸な人間であると嘆いている。つまり、**physical, social being** が「満たされた、良好な」状態にあるにもかかわらず「不幸」と感じている場合がある。

一方で、生涯にわたって治癒の見込めない病を抱えているにもかかわらず、その顔からやすらかな微笑みが絶えることがない。つまり、**physical being** が「満たされていない」にもかかわらず「幸い」を感じていると思われる人々がいる。また、身体的な病を得ることで、それ以前には気に留めることがなかった種類の幸いに気づく人もいる。

WHOの定義が3つの観点(**physical, mental, social**)の **being** が「complete すべて」「満たされる」ことで **well-being** が成立するのであれば、これらの2例は **well-being** ではない例とみなされることになるだろう。しかし、これらの例を日常的に経験し、見聞きするにつけ、「満たされた、良好な状態」と「幸福」は概念の種類が異なるだけでなく、**well-being** を考えるためには、どちらの概念も必要であり、それらの相互関係について考えることが欠かせないことがわかってくる。

2.2 WHOが目指すこととデータ・サイエンスの重要性

WHOがこの **well-being** の定義を通して世界に訴えようとする中心点が、より多くの人々の **well-being** の実現を世界が一丸となって助けていこうという点にあることは間違いないだろう。この世界に生きる誰もが身体的に健康になり、雨露をしのぐ住まいがあり、食物に困らないようになり、また、人間としてひとり一人が尊敬され、保護されるための仕組みを世界が手を携えて整え、互いにサポートしあうことは当然のことである。そして、そのサポートの仕組みを作り、援助の行動を促すためには、**well-being** の状態を数字等で可視化して、その根拠を客観的に計測し、基本データとすることが欠かせない。

たとえば、ある国の国民の死亡率が高いことがデータに示されれば、そのようなデータをもたらした原因に関する究明や、その国の **physical well-being** を向上させるための研究、検討がしやすくなる。この意味で、データの中に新しい問題を見出し、データを通じてそれらの問題の解決への道筋を見出そうとするデータ・サイエンスを通じた問題解決の試みは今後、これまで以上に広がっていくだろう。

しかし、一方で、数値化されたデータに基づいてのみ、人間(と、存在物のすべて)にとっての **well-being** のありさま全体を理解しようとするには無理があること、**well-being** がその種類、相互関係において、複層的、横断的であることを認め、より多角的な考察の必要性を訴える声も増加しているのである。

では, well-being についての, 上記のいくつかの問いに取り組むために, 本研究は以下の二つのステップを踏んで考察を進め, 本稿においては, その第 1 ステップについて明らかにしていきたい。

<第 1 ステップ>Well-being とは何か。アリストテレスの善の定義と善と悪, 人間の行為と幸い, spiritual pain について

<第 2 ステップ>Mental レベルと spiritual レベルの区別と関係, spiritual ケアと二つの幸福について

3. well-being の基準と善の定義

Well-being の問題に取り組むにあたって, 最初に問う必要があるのは well-being (「満たされた, 良好な, 状態」) は, そもそも何を「基準」として well とすることができるのかという問題である。

この問いに答えるにはアリストテレスにさかのぼることが助けになるだろう。

日々の生活において, 我々は, 何か「善い (良い)」「悪い」という言葉を頻繁に使用する。「今日は身体の調子が良い」「夕方には天気が悪くなりそうだ」「この文章は良くかけている」「最近悪い出来事ばかりが続いているね」などと。では, これらの発言をする際に, 我々は「善い (良い)」「悪い」をどうやって判別しているのだろうか。この問いを改めて問うと, 我々人間は, 善悪という言葉「使用する」ことはできるが, その定義についての理解は大変あいまいであることに気付かされる。

「善とは何か」という定義は, 人間の思索の歴史における難問の一つである。そして, 様々な定義が提示されては訂正されるという繰り返しの中で, アリストテレスが明らかにした定義 (場所を明らかにする) がその後の思想史におけるこの問題の基本をなすこととなった。

アリストテレスの「善」の定義の斬新性は, 「善」の「前提」を明らかにしたことである。

3.1 アリストテレスの善の定義と「テロス (本来性)」

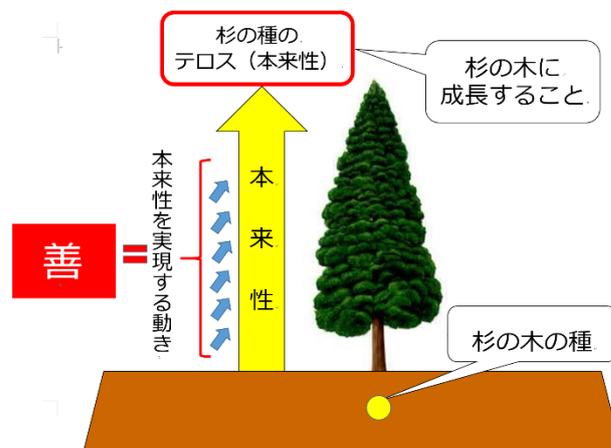


図1 テロスと善

アリストテレスによれば、「何か」の状態や行為が「善」であるか否かの判断は、ある「前提」に基づいている。その前提とは、すべての存在物が持っている「テロス (telos)」である。⁵ 「テロス」は「目的」「目標」「目指したい方向性」などの和訳が当てられることがあるが、本稿では「本来性」と訳することとする。

例えば、一つの杉の木の種が存在したとする(図1)。その種が「目指したい」ことは、土の中に落ちて、水分と栄養を得て土の上に芽を出し、太陽の光を受けて若木となり、やがては杉の大木となり、花粉を飛ばして子孫を残すことである。この一連の動きが杉という存在の「テロス(本来性)」である。「テロス(本来性)」とは、その存在物のうちに内蔵されているプログラムのようなもので、この「本来性」に照らし合わせて考えると、杉自身が土から水分や栄養を吸収することは、このプログラムに沿って「本来性の実現していくための動き」であり、アリストテレスはそれを「善」と定義したのである。

「善」に対応するものとして「悪」とは何かという問いについては、アリストテレスの取り扱いはいまいであったが、紀元5世紀になって、アウグスティヌスが明らかにすることとなった。⁶

アウグスティヌスによれば、「悪」とは「善の欠如」である。

この「悪」の定義を、アリストテレスの善の定義と一貫させて言い直すならば、「悪」とは、本来性に逆らった動きである。杉の種の例に戻るならば、杉の種が芽を出したが、他の大きな植物にさえぎられて太陽の光を浴びることができず、その結果枯れてしまうのは杉の本来性が阻害された結果生じる「悪」である。

この二つの定義から明らかになってくることは、すべての存在物にとっての善悪の判別基準の基本は、自らの、あるいは、他の存在物の動きが、個々の存在物の「本来性の実現をもたらすか否か」であるということができる。

そして、このアリストテレスの「善」の概念を基本とすることで、well-beingの定義は理解が比較的容易になってくる。先に、「wellと言えるのは、何を基準とするのか」という問いを立てたが、アリストテレスの善の定義に照らし合わせれば、wellか否かの判断基準は「本来性の実現しているか、実現しつつあるか」という点にあると考えることができるのである。

次に、本来性と人間の行為について考えを進めてみたい。

3.2 人間の行為と善悪：本来性に関する無知と行為

人間は他の動物と異なって、高度な思考能力と可能な限り善なる行為を行いたいという志向性を持っている。したがって、たとえば、自分の家の庭に花が芽吹いたのに気づけば、その花に水をやって成長を助けようとする可能性が高い。では、人間はどのような状況においても善を行うことが可能であろうか？

この問いは、二つの問題が絡まってくる。ひとつは、行為の相手の本来性についての「理解」という問題である。

まず、ひとつの例を考えてみよう。

ガーデニングが好きなある女性(A子)に、友達が一本の若木をプレゼントしたとしよう。A子はその若木を自分が手入れをしている庭の一角に植え、毎日水やりをし、若木はすくすくと成長していった。ところが、ある一定の高さまで成長した後、その木が腐り始

めた。A 子は驚いて、知り合いの植木屋に事情を話した。その植木屋はその木が腐り始めた理由について次のように説明をした。「A 子さんね、この木は一定の高さに育つまでは十分に水やりをしなければいけない。だけど、一定の高さまで育ったら、その後は、極力水を控えないと育たないばかりか根腐れを起こすのだよ」と。

A 子はその木に水を与え続けた行為は「善かれ」と思っただけの行為である。しかし、その「善かれ」と思っただけの行為も、その行為の対象となる木の性質、つまり、本来性についての理解が欠如していたために、A 子の「その木に対して善きことを行いたい」という意図とは逆に、その木にとっての悪を生じさせる結果となってしまったのである。

この例が示すのは、人間の行為が「善」となるためには、善を行う相手、対象物の「本来性」の理解が前提として欠かせないという点である。

しかし、様々な存在物の本来性を理解することは簡単なことではないばかりか、本来性の理解の必要性について気づかないまま行為を行う場合が少なくないという現実がある。この現実を無視して、善かれと思っただけで他者や他の存在物に対して行う行為は、往々にしてよけいな世話、有難迷惑となりえるであろうし、場合によっては明確な悪となるのである。

3.3 本来性の絡み合いと行為の選択

もう一つの問題は、様々な存在物の本来性の絡み合いに関する問題である。

この世界には様々な存在物が関係しあって共存している。では、個々の存在物のそれぞれの本来性の実現はどのように関わりあっているのだろうか。

ここに5つの存在物(A, B, C, D, E)があり、それぞれが内蔵している本来性を「ベクトル(矢印)」として表現することにする。(図2) もし、これらのベクトルがすべて同じ方向に向いてそろっているならば、Aにとって「善い(+)」ことが起こった時、Aにとっての「善い」出来事はBからEの残りの4つの存在物にとっても「善い(+)」できごととなりうる。例えば、並んで生えているA~Eという花がすべて、成長するために水を必要としているならば、それらの花全てに雨がふりそそぐことは、それらの本来性を共に実現させる「善き」出来事である。

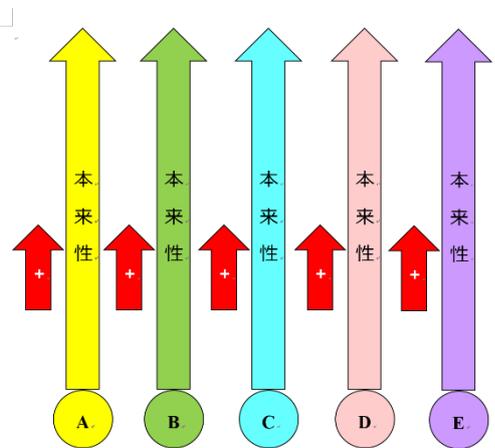


図2 本来性のベクトルが同じ向きの場合

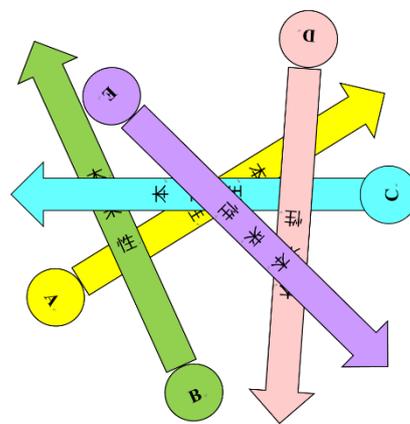


図3 本来性のベクトルの向きが異なる場合

しかし、ベクトルの方向がそろっていない場合（図 3）、ベクトルの絡み合いと対立にもとづく悪が生じてくる。

たとえば、ある山に、杉の若芽が芽を出し、同時期に、鹿の子が誕生したとする。鹿の子は山を動き回るうちに、育ちつつある杉の若芽に遭遇する。何が起こるだろうか。杉の若芽は鹿にとっての好物の一つである。その子鹿は迷わずにその杉の若芽を食べるであろう。この「食べる」という鹿による、ひとつの行為は、鹿の身体に栄養を与えるからには、鹿にとっては「善き」行為である。しかし、食べられた杉の若芽は生命が断たれるという「最悪」の行為となる。（図 4）

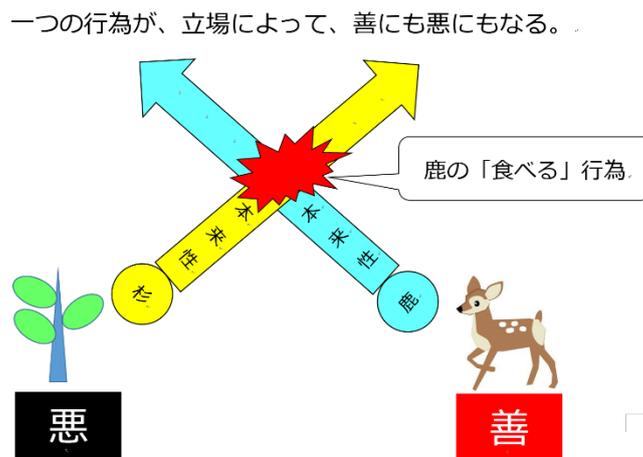


図 4 本来性の衝突によって生じる善と悪

自然界を見渡してみると、本来性のベクトルが対立することで生じる善と悪が複合的に発生し合い、自然体系を構築していることがわかる。

では、このような複雑な成り立ちを持つ自然界に人間が登場することで何が起こるだろうか。

すでに述べたように、人間は、その高度な知性によって、他の生物、動物に比べて、可能な行為の選択肢が広く、その選択肢の中から、「善い」と考えられる行為を見出し、選択して行為に及ぶことができる。

例えば、空腹の猫と人間の目の前のテーブルの上にハンバーグがひとつ置かれてあるとする。猫は、飢えを満たすために、目の前のハンバーグを食べてしまうだろう。しかし、人間は、3つの段階を踏んで、行為を選択していく。

第一段階は、その状況における可能な行為の発見である。この段階において、人間は、その具体的時と状況において「自分に何ができるだろうか」と考え、自分に「可能な行為」を見つけようとする。

たとえば、人は知性を働かせることによって、①猫と同じように、そのハンバーグを取って食べる ②ハンバーグの持ち主を捜し、探し当てたら、その持ち主に懇願してそのハンバーグを分けてもらう ③水を飲んで、その場の飢えを我慢する ④（家が近ければ）自宅に戻って何かを調理して食べる、などいくつもの可能な行為を見出していく。

第二段階は、それらの「可能な」行為の中から、「善い」と判断できる行為をえらびだす段階である。この時点で①は「悪しき」行為として排除されるだろう。残るのは②③④である。

第三段階では、さらに、自分が置かれている固有の状況に照らし合わせて、「善い」行為の中から「より善い」、あるいは、その状況において優先されるべき「善」と考えられる行為（たとえば③）を選択する。

そして、その選択に基づいて、最終的に残った「善」を行為に移そうとし、実行したり、しなかったりする。

さて、このような能力を持った人間が、先に述べた、自然界における様々な本来性のぶつかり合いを目にしたとき、どのような行為に出るだろうか。

杉の若芽と子鹿が遭遇した時、人間がいなければ、自然の成り立ちとして、欲望にそって動くことのできる子鹿が勝つであろう。しかし、この対立に人間が関わった時、もし、その人間が、杉の若芽を助けたいと考えたとすればどうするだろうか。いくつもの可能性が考えられるが、最も手っ取り早い杉の若芽の守り方は、子鹿を殺してしまうことである。つまり、杉の木が生き続けることを助ける善と子鹿が成長することを助ける善を天秤にかけて、杉の木を助ける善を選ぶ。そして、選んだ善を実行する(この場合は、子鹿を殺す)ことによって、自然界の関係に変化を生じさせる結果を引き起こすのである。

ここで問題となるのは、人間が介入することによって自然界の関係に生じさせた変化は長い目で見て望ましいものであるのか否かということである。

先に述べたように、個々の存在物の本来性がどのようなものであるかについての理解は簡単なことではない。人間は往々にして、相手の本来性についての理解が欠如したまま、理解が欠如したことに気付きもせず、良かれと思って悪をなしている。その結果として、絡み合っている複数のベクトルに対して人間が行為を介入させることによって、個々の存在物への介入問題以上に複雑な「余計なお世話」又は、長期的な「悪」を生じさせる可能性が生まれてくるのである。

3.4 存在の階層と本来性の対立と選択

本来性の絡み合いの問題は、複数の存在物間の本来性の絡み合いの問題だけではなく、個々の存在物を構成する「レベル間の本来性」の絡み合いの問題を含んでいる。



図5 存在の階層

哲学では、人間を含む存在する物すべては、いくつものレベルにおける仕組みが絡み合っ
てひとつの存在物として実在していることを説明している。⁷ これを本論では「存在の
階層」と呼ぶことにする（図5）。

人間を例に挙げれば、人間を構成している最も深層にあるのは原子であるが、原子は中
性子、陽子が原子核を構成し、原子核の周りに電子が位置している。これは「物理的レベル」
での人間の構成要素である。

物理的レベルの上にあるのが、「化学的レベル」である。化学的レベルは、物理的レベル
の原子で成り立つ2種類以上の物質が化合、分解等の変化を起こして、別の物質に変化する
レベルである（物理変化は形状、状態が変化するだけで物質の構成要素に変化はない。
例：水が、氷や蒸気に変化するなど、）。人間の場合、体内で起こる、食べたものの分解、新
しい物質の構成などの例は化学的レベルでのできごとである。

さらに、化学的レベルの上に「生物的レベル（食物の消化、吸収）、動物的レベル（移動、
食物の咀嚼）」そして、「精神的レベル」が重なっている。

各レベルは、そのレベルを構成している要素の動きが一定の方向性、つまり、そのレベ
ル独自の本来性を持っていることがわかる。例えば、生物的レベルは、その生物を生存さ
せるという本来性に向かって働いている。

この意味で、この世界に存在するすべての存在物は、存在の階層のそれぞれのレベルが
そのレベルの本来性を求めつつ、複層的に関係しあって、それぞれの存在物を形成してい
るといことができる。

では、これらの各レベルの本来性はどのように関係し、どのような問題をかかえている
のであろうか。二つの問題がある。

第一の問題は、「物理的レベル、化学的レベル、生物的レベル」の求める本来性と、「動
物的レベル」、「精神的レベル」のそれぞれが求める本来性が場合によって、あるいは頻繁
に、対立する点である。

では、レベル間の本来性の対立とはどのようなことだろう。そして、その対立に対して
人間はどのような行為に出るのだろうか。

髪が伸びる続けることは生物的レベルにおける本来性に向けた動きである。しかし、動
物的レベルで考えると、伸び放題の髪は、動物的レベルの本来性の一つである「自由な行
動」の邪魔になる。この意味で人間が「髪を切る」という行為は、動物的レベルの本来性を
優先するために、生物的レベルの本来性を阻害する行為である。

食欲は動物的レベルでの本来性を満たすために必要な欲求であり、この欲求に基づいて
食物を摂取することで動物は生きることが可能になるだけでなく、「おいしいものを食べ
てうれしい」という精神的レベルでの本来性も満たすことができる。一方で、必要以上の
食物摂取は化学的レベル、生物的レベルで血糖値の上昇と、それにもとづく血管障害等、
生存を脅かす結果につながり得る。

眠気は動物を睡眠へいざなうという、動物的レベルの本来性を満たすために欠くべから
ざる現象である。睡眠がとれないと動物は死に至る。一方で、精神的レベルにおいて、眠ら
ずに夜を徹して読書をしたいという願望は、知的地平を広げるとい精神的レベルでの本
来性になつたものである。

動物以外の生物は、レベル間の本来性が対立した場合、より下位のレベルの本来性へ上位のレベルの本来性がひっぱられるのが常であり、レベル間の本来性の選択の問題は生じにくい。たとえば、犬の場合、空腹が満たされると眠ってしまうことが多く、眠らずに、知性のレベルの動きにそってあちこち探索に歩き回るというケースは珍しいのではないだろうか。それは、犬の精神的レベルよりは、血糖値が上昇することによって生ずる生物的レベルでの睡眠への誘導力の方が強いからだと考えてよいだろう。

しかし、人間の場合には、高度な精神を持つがゆえに、下のレベルの本来性に必ずしも引きずられることなく、自分を構成する様々のレベルの本来性のどのレベルを優先するかについて考え、選択をすることができる。その結果、人間は「今夜は、生物的、動物レベルの本来性を優先して（つまり、就寝する）、精神的レベルの本来性を中断する」のか、逆に、「生物的、動物レベルの本来性を少し犠牲にして（つまり、睡眠時間を削って）でも精神的レベルの本来性を優先するか」といった、具体的な時と場所に依じて複層的な本来性どのレベルを優先し、総合的にどのような well-being のあり方を求めるのかという難題に日々迫られることになったのである。

4. Mental レベルと Spiritual レベル

4.1 「満たされた、良好な状態」と「幸い」

第二の問題は、精神的レベルの本来性にかかわるものである。

先に、well-being の日本語訳として充てられた「満たされた、良好な状態」と「幸福」という概念の違いに触れたが、「幸福」とは人間という存在の階層の中に「精神的レベル」があつてこそ意味を成す言葉である。

もし、猫が十分な食物を摂取することができていて、体重計測、血液検査をすることで、生物的レベルの本来性が満たされていると人間が判断することはできたとする。しかし、その猫自身が、それを「幸福」と感じているか否か、それがどのような感覚であるのかについては明確に分かりようがない。一方、人間は、空腹が満たされ、安心した場所で睡眠が確保でき、体調がよければ、その状態について「幸福である」と感じる者が多いだろう。（少なくとも、不幸であると感じる場合は少ないだろう。）

しかし、存在の階層とそれぞれのレベルの本来性の対立の問題を考えると、どのレベルの本来性をもって幸福とを感じるかは一様ではない。ある人は生物的レベルでの本来性を害してでも大量の食物を摂取した結果、短命となっても幸せとを感じるかもしれない。人によっては、病によって身体の移動が不自由になり、動物レベルの本来性が阻害されても、読書を通じて、精神の世界を広げる精神レベルの本来性の充足としての幸いをより大いなる幸いと感じるかもしれない。

そうなると、人間が、どのようなレベルの、どのような種類の人生の展開をもって「幸福」と感じるかはより複雑な問題となってくる。

4.2 精神的レベルの区別：mental レベルと spiritual レベル

精神のありようを詳細に研究し、どのような状態をして幸福とを感じるかの問題を追及していくと、精神的レベルを他のレベルと同様に、ひとつのレベルとしてまとめることの難しさが浮き上がってくる。Spiritual という語を健康の定義には入れなかったものの、WHO

が spiritual に関する問題について検討を続けざるをえない主な理由はその点にあると言えるだろう。

今日、精神の well-being に関して二つのレベル「mental レベル」と「spiritual レベル」を区別し、他の存在のレベルとそれらの関係について考察する必要性がどの領域よりも高まっているのは医療の領域である。

4.3 Mental pain と Spiritual pain

存在の各レベルでの well-being の欠落を表す言葉の一つが pain であるとすれば、医療が目的とするのは physical と mental レベルの pain の解消である。しかし、mental レベルの pain とは同一視できない別の pain の存在が次第に明らかになってきた。

Pain は日本語で「痛み」「苦しみ」と訳することができるが、「痛み」と「苦しみ」は異なるものである。

その違いを説明するために、「動物実験で針を刺されるネズミは苦しむか」を問うてみよう。

針を刺されることによって、ネズミの知覚神経は刺激され、「痛み」は生じているであろうと推測することはできる。ネズミ自身の逃げようとする動きや様々な要素の観察や計測によって、痛みが発生している事実をモニターに映る視覚的データや数字等で把握することと一般的説明が可能である。しかし、針を刺されることについて、そのネズミは「苦しんでいる」と言えるだろうか。然りと言うのは困難である。

ウォルデマール・キッペスは『スピリチュアルケア』の中で、「『痛む』のは心身、『苦しむ』のは人である」と述べている。⁸ 身体の痛みはもとより、心の「痛み」も、あるレベルまでは、他者による観察と診断が可能であり、痛みの種類の一般化（例えば、「統合失調症」はその病態の一般的特徴の理解と説明が可能になっている）と一般化に基づいて開発された対処療法が可能である。しかし、「苦しみ」とは、存在の意義、苦悩の意味、死生観、善悪を問う倫理観、価値観などにかかわって、個人個人に特有なものとして生じてくるものである。

「痛み」と「苦しみ」の違いの例の一つがアーサー・クラインマンによって報告されている。

ハーバード大学で教鞭をとる精神科医師アーサー・クラインマンのもとへ、一人の男性が受診を求めてきた。ウィンスロップ・コーエンという名のその患者は、健康や家族を含めた人間関係に恵まれ、社会的にも成功して 60 歳まで生きてきた。ところが、60 歳の誕生日に、昔のある記憶が突然蘇ってきた。それは、40 年前（第二次世界大戦中）、海兵隊員として従軍していたときの記憶である。ある日彼らの軍は、敵（日本軍）の野戦病院を襲い、コーエンは、その野戦病院で傷を負った兵士たちの手当てをしていた無抵抗の軍医を銃殺したのである。

以下は、クラインマンが描写したコーエンの告白である。

彼は軍医だったに違いありません。わたしたちは彼のいた陣地に攻撃をかけたのです。小さな野戦病院がありました。死に瀕していた兵士が担架に乗せられていました。わたしに気づいた軍医は、足元に聴診器を落として手を挙げたのです。そ

れまで彼は、担架に覆いかぶさるようにして、胸を血だらけにして兵士の手当をしていました。……軍医は静かに待っていました。思慮深く、鋭敏に。命乞いなどありませんでした。無言でした。微動だにしませんでした。今、あえて思い返してみると、彼はまったくもって人間的で、わたしに同情すらしていたように思います。やつれた悲しげな顔で待っていました。恐ろしいことに、わたしは撃ってしまったんです。彼を殺してしまったんです。地面に崩れ落ちながら、彼はまだわたしを見ていました。そしてわたしは……わたしは何度も引き金を引いたのです。⁹

この殺害は、戦争行為の一環として起こしたことであり、コーエンが法的にとがめられることもなく、終戦後、コーエンは法律の勉強をし、法律家として成功した人生を送っていた。しかし、その殺害の記憶は40年に渡って彼の心をむしばみ、長い時を経て精神的疾病として現れてきたのである。その疾病の発現に気付いた妻と娘がコーエンをクラインマンのもとに送り、クラインマンは心的な外傷からきたうつ状態であると診断し、抗うつ剤を処方することによってコーエンの抑うつ症状は解消した。

うつ状態からの治癒についてコーエンの妻と娘は喜び、クラインマンに感謝した。ところが、コーエン自身は感謝するどころか、「自分は治ってよかったのだろうか、この病気から解放されてよかったのだろうか」と苦しみ始めたのである。

精神的疾病は、精神的レベルの *pain* であるからには、その状態から回復することは幸いなことであるはずである。それにもかかわらず、この患者は、自分の病が癒えたことを幸いと感じるどころか新たな「苦しみ」をかかえるようになったのである。心身の痛みから解放されているにもかかわらず、なぜ、この人は苦しむのか。

クラインマンは、この問いをきっかけに、精神の中に *mental pain* とは異なるレベルの *pain* が存在すること、そして、その *pain* が存在するのは *spiritual* (霊的) と名付けられるレベルであること、そして、人間の精神の問題は、これらの二つのレベルの違いを理解することなし解決しえない種類があることに気付くこととなった。

では、*spiritual pain* や *spiritual* レベルでの様々な精神活動とは、クラインマンらによって、現代になってはじめて発見されたものなのであろうか。

実は、人類は有史以来、*mental* レベルとは異なる *spiritual* レベルでの精神活動の特有性に注意を向け、*spiritual pain* に関する様々なケアの文化を長年にわたって築いてきたのである。しかし近代科学と医学の発達とともに、*spiritual* レベルの精神活動と *spiritual care* に関する興味が後退していった。ところが、過度な物質至上主義的世界観が広がることによって生じたしたところを病む人々の増加に伴って、*mental* レベルと *spiritual* レベルの区別と、それぞれへのケアの違いの理解の必要性が再び注目を集めることとなったのである。

5. まとめ

5.1 本研究のまとめ

本研究では、WHOの健康の定義をきっかけとして、*well-being*の定義をアリストテレスが提示した「テロス(本来性)」の概念を基本として明らかにしようとしてきた。

アリストテレスによれば、すべての存在物が本来性を内包しており、本来性の実現に向かう動きが「善」である。この定義に基づけば、well-being を「本来性が実現すること」と理解することができる。しかし、この世界に存在するすべての物事の本来性は、相互に、複雑に絡み合っており、様々な本来性の対立が「悪（善の欠如）」という現象を引き起こす。

そのような世界に対して、人間は、高度な知性によって、可能な行為を複数見出し、その中から、より大きな善をもたらすと考えられる行為を選択して実行し、その行為は、存在物の本来性の絡み合いに大きな影響を与えてきた。

しかし、人間一人ひとりの視野の広さには限界があるために、人間は、行為を行う対象物の本来性を見誤り、それによって、意図に反して様々な悪を発生させることがある。また、一時点、あるいは、短期的観点において人間が善と考えるものが、より広く、長期的な視野において善でありうるかを把握しつくすことはできない。この意味で、人間は、自らの行う日々の様々な行為が、自分の人生だけではなく、世界に存在するすべての物事に対してどのような影響を及ぼすかにして、絶えず問いつける責任がある存在である。

さらに、ひとつの存在物はひとつの種類の本来性で成り立っているわけではなく、いくつものレベルと、レベルごとの本来性が組み合わさって成り立っている。そして、レベルごとの本来性もまた複雑に絡み合うために、ひとつのレベルの本来性が充足することだけに視点を固定して、そのレベルの充足だけが、その存在物にとっての最終的な well-being であると判断することは困難である。

特に、人間にとって、自らを構成する存在の階層のそれぞれの本来性がどのように実現することが、個々人の最終的な well-being であると考えられるかは、理解が最も困難である。

Well-being には「良好な状態」「幸福」という日本語も充てられてきたが、前者は、本来性の実現を、客観的な視点からとらえようとする観点をあらわす言葉であるのに対して、後者は、本来性の実現を経験する主体の心が感じ取るものである。

人間は、他の存在物と異なり、自らの本来性の実現を喜ぶことができるが、その喜び、つまり「幸福」の種類は、充足する本来性のレベルによって異なってくる。そして、最も大きな差を生じるのが、精神的レベルにおける二つの異なるレベル（mental レベルと spiritual レベル）に基づく幸福感と、その幸福の喪失たる pain である。Mental レベルを含めて、すべてのレベルでの本来性が満たされていても、spiritual レベルにおける pain を経験する場合、人間は深く病む。

5.2 次稿において考察すること

次の稿では、本稿の続きのとして、まず、mental レベルと spiritual レベルの違いがどのようなものかについて考える。そして、spiritual レベルの存在が人間の存在の基底となっていること、spiritual レベルの精神活動が、五感で経験できる世界とそれを超越した世界を結ぶ要であることを、人類が、文化を超えて観察し、その観察に基づいて豊かな文化を築いてきたことを俯瞰し、現代における人間全体へのケアとしての spiritual ケアの重要性と、spiritual レベルにおける幸福を、その他のレベルにおける幸福と対比させて考察を進めることとしたい。

注

- 1 「WHO の健康定義制定過程と健康概念の変遷について」 臼田寛, 玉城英彦, 河野公一
『日本公衛誌 第51巻 第10号』2004年, pp. 884-886
- 2 「同書」, p. 886.
- 3 「WHO 憲章の健康定義が改正に至らなかった経緯」 臼田寛, 玉城英彦, 河野公一
『日本公衛誌 第47巻 第12号』2000年, pp. 1014-1015.
- 4 例えば, WHO は『がんの痛みからの解放とパリアティブ・ケアーがん患者の生命への善き支援のために一』の中, p.5 で, 「パリアティブ・ケアは, すべての人間の全体的な福利にかかわるため, パリアティブ・ケアの実施に当たっては, 人間として生きることが持つ霊的な(spiritual)側面を認識し, 重視すべきである。」と述べている。
- 5 アリストテレス『ニコマコス倫理学』第一巻, 第一章
- 6 アウグスティヌス『告白』第7巻
- 7 存在の階層については Lonergan, Bernard, *Insight: A Study of Human Understanding*, London: Darton Longman and Todd 1957年, pp.262-270 に詳しい。
- 8 キッペス『スピリチュアルケア』サンパウロ 1999年, p.21.
- 9 クラインマン『八つの人生の物語』誠信書房 2011年, pp.36-37.

引用文献

- アウグスティヌス『告白』
 アリストテレス『ニコマコス倫理学』
 臼田寛, 玉城英彦, 河野公一 (2000) 「WHO 憲章の健康定義が改正に至らなかった経緯」『日本公衛誌 第47巻 第12号』
 臼田寛, 玉城英彦, 河野公一 (2004) 「WHO の健康定義制定過程と健康概念の変遷について」『日本公衛誌 第51巻 第10号』
 キッペス, ウェルデマール(1999) 『スピリチュアルケア』サンパウロ
 クラインマン, アーサー(2011)『八つの人生の物語(2009)』誠心書房
 世界保健機関編(1993)『がんの痛みからの解放とパリアティブ・ケアーがん患者の生命への善き支援のために一』金原出版
 Lonergan, B. (1957) *Insight: A Study of Human Understanding*. London: Darton Longman and Todd